土曜フォーカス 2015

鴨川に漁場作ろう

漁協・市民ら「再生」始動

京都府内の河川で活動する漁協が、川の再生に乗り出している。自然が持つ力を生かして魅力ある漁場を作ろうという狙いだ。市民や行政も参加し、全国的にも先進的な取り組みが、京都の中心を流れる鴨川で進む。（目黒重幸）

鴨川との合流点に近い京都市左京区の高野川。川の岸寄りに入り江状に水がたまった「ワンド」がある。今月上旬、賀茂川漁協（北区）の澤健次組合長（40）は、ワンドの浮き草をつかんで声を弾ませた。「おっ、卵や。コイか。うわー、初めて卵を産んでくれた」

ワンドは川のしゅんせつ工事で土木業者が掘り返した所を、漁協が頼んでそのまま残してもらった。産卵場所となるよう、川岸で刈った草を浮かべた組合員の努力に、魚たちが応えてくれた。

同漁協は5年前、組合の解散直前に追い込まれたことがある。釣り人からの遊漁料収入が落ち込み、河川工事の際の補償金なども減って経営が行き詰まった。解散を危ぶんだ行政や学識経験者らが支援に乗りだし、2013年、まだ38歳の澤さんを組合長に選出する異例の人事で改革に乗り出した。

北区で釣具店を営んでいた家に生まれた澤さんは、子どもの頃から川が遊び場だった。「魚が見えるとうれしい。できるなら釣ってほしくない」と組合長らしからぬことを言うほどの魚好き。その熱意が買われた。

各漁協には漁業法で魚の増殖義務が課せられている。大半の漁協は稚魚や成魚を業者から買って川に放すことでその義務を果たしている。だが澤さんは「漁協がやらねばならないのは、放流ではなくて川の能力の回復だ。虫や植物も含め、川の自然が豊かにならないと魚は増えない」と言い切る。

ワンドづくりのほかにも魚の新たな増殖策を探っている。4月には他の漁協とともに中流部にハエ（オイカワ）の産卵床を試験的に作った。来年以降は、渓流魚の産卵に配慮して禁漁を早めたり、持ち帰る魚の数を制限することも考えたいという。魚が一カ所にかたまらないようアマゴの放流場所を見直したり、気軽に釣りを体験できるようハエなどの遊漁料を値下げしたこともあり、釣り人は順調に増加。昨年の遊漁料収入は約127万円で、前年の65万円からV字回復を果たした。

晴天に恵まれた今月20日、伏見区竹田の鴨川に約30人が集まった。市民や学識者、賀茂川漁協や京淀川漁協（八幡市）などでつくる「京の川の恵みを活かす会」のメンバーだ。この日は、アユの遡上を阻んでいる堰に仮設の魚道を取り付ける作業が行われた。

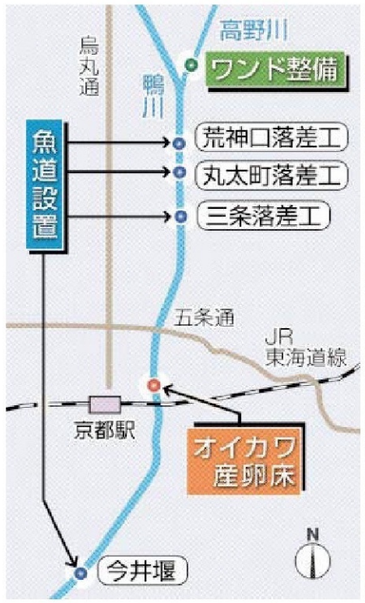
自然界ではアユは秋に産卵し、ふ化した魚は海に下って成長、翌年の春から初夏にかけて川に上り、川石の藻を食べて成長する。だが鴨川にはアユが上れないほどの高い堰や段差が複数あり、上流部で釣れる魚の多くは漁協が放流したものだ。

同会は自然のサイクルを復活させようと11年から活動している。今年は4カ所に魚道を設け、丸太町通より上流まで魚を上らせる計画だ。

作業をしているすぐそばで、大阪湾からさかのぼってきた13～14センチほどのアユの群れが、魚道の完成を待ちわびるかのように銀りんをきらめかす。

率先して作業に当たった澤さんは、ユニークなプランをあたためている。「いつか鴨川の三条あたりで、アユをとる『やな』を設けたい。きっとものすごい観光資源になる。そのためにも、たくさん天然のアユを上らせないと」。賀茂川漁協ではあす31日、アユ漁が解禁される。

9面に続く



草を入れたワンドで魚の産卵を調べる賀茂川漁協の澤組合長（手前）ら―8日、京都市左京区の高野川下ワンドの草に産み付けられた魚の卵

漁協関係者や市民、学識者らが参加して行われた魚道の設置作業（20日、京都市伏見区の鴨川）

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

© 京都新聞社　無断複製・転載を禁じます